

特集にあたって

白川真澄

いま、全国の大学に「改革」の嵐が吹き荒れている。

二〇〇四年の国立公立大学の独立行政法人化は、大学を経営の効率化と組織再編に駆り立て、「経営体」・「事業体」・「経営戦略」といったネオ・リベラリズムの発想が研究・教育の場を完全に支配している。毎年の予算一律シーリングの下で外部予算の獲得をめぐる競争の激化、成果主義的な評価システムや任期制の導入、教員の削減と非常勤講師の使い捨て、地方での大学の統廃合、定員割れした私立大学への補助金打ち切り。「勝ち組」の大学と「負け組」の大学への二極化が進行し、私立大学のうち一〇〇近い大学が経営破たんの危機に陥っていると、地方の国立大学も軒並み交付金を削減されて破たんせざるをえないとも言われている。大学「改革」は、大学という教育・研究の場に市場原理・競争原理を全面的に導入するネオ・リベ「改革」であると同時に、独立行政法人化に伴って理事会や経営評議会や学長がいつさいの権限を握り、わずかに残されていた教員や学生が発言権を根こそぎ奪う「改革」でもある。文科科学省の管理・統制が強まる中央集権化にほかならない。ネオ・リベ「改革」は強権的に行われるという真実が、絵に描いたように進行している。

すでに、大学における知のあり方は細分化・制度化が進

み歪んだものとなってきていたが、大学「改革」は知のあり方をますます荒廃させている。経済界の要請に応える形で、巨額の協力資金を得て先端的な研究を担う少数の大学の対極に、大半の大学は、ますます就職のための専門学校化しつつある。そして、大学院大学の急増は、高学歴ワーキングプアを年々生みだし大量に累積している。こうした状況で、学生たちに希望や理想や意欲を持つと言うのは、たしかに無理な話である。

本号では、「改革」の嵐にさらされる大学の現状を多くの切り口から直視するために、大学に関わるさまざまの当事者に発言してもらった。本号を通じて、私たちがめざしたことは、現在の大学における知のあり方をきびしく捉えかえし、在野の知の復権と結びつけて、批判的で創造的な知のあり方を探っていくことにある。荒廃する現在の大学において制度化・細分化され没批判精神に覆われた知のあり方を批判し、抵抗と生活の現場が提示する問題を理論化・思想化する原点に立ち返った知のあり方を、大学の内外から創造することである。本号がこうした議論のきっかけとなれば幸いである。

(しらかわますみ／本誌編集長)